

トリトリの実 モデル梟ってそっちの梟！？

俺だ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

二度目の人生をONE PIECEの世界で過ごす。

思いついたので書いてだけです。

更新途切れる可能性大。

目次

プロローグ	1
1. 悪魔の実	4
2. 能力	8
3. 10年後	11

プロローグ

ぷかぷか、と何もなかったところで俺は浮いていた。

突然で悪いが神様を信じているだろうか。

俺は信じていなかった。

それはそうだ。見たことがないし、願いが叶ったこともない。

初詣でお願いし、おみくじで叶うと書かれていた願い事も、結局叶わなかった。

小学校の頃には才能や顔の良し悪しが人生において重要なのだ、と思いき知らされる。

そんな世の中を作った神様がいたとしても、全知全能なんかではない。

何故こんなことを考えているのか。

それは神に今、こうしてあっているからだ。

うん、完全に頭おかしいやつだ。

しかし車に轢かれたあと、無駄に神々しい場所で、創作物の中しか見たことのないような長い髭を生やし、白い布を纏っただけのような服を着て、髪を自称している人を見れば、誰だってそう思う。

「才能によって不幸になってしまった子よ。何か望みを言いなさい」

目の前の男が俺に話しかける。

その目は慈悲に溢れていて、俺のことを想った発言だと、前世で友達にならなかった俺でもわかった。

夢か。こんな都合のいいこと世の中には存在しない。

そんな本音を隠しつつ、夢の中だけでも幸せな気持ちを味わおうと、叶えて欲しいことを考える。

生き返らせてほしいのは当たり前として、創作物の世界で創作物の力を手に入れて転生したい。

それとやっぱり欲しいのは圧倒的な才能と美しい容姿。前世で手に入らなかったものを手に入れたと思うのは当然だ。

「叶えよう」

俺が冗談でも考えている途中で男は短く呟くと、突然目の前に出現

した鈴を手に取り、鳴らした。
え、と驚く間も無く襲う眠気。なぜか抵抗することもできず、俺は目を閉じた。

○☆☆☆

ONE PIECE、というものを知っているだろうか。
週刊少年ジャンプで連載されている、少年漫画である。

その漫画は世界中で親しまれており、かくいう俺もその漫画が好き
な一人。

明かされる登場人物の過去。伏線。新しい悪魔の実など。
それら全てに胸を躍らせた。

俺はそのONE PIECEの世界に転生したようだ。
恵まれた容姿と才能を持って。

俺が夢だと思っていた、あの神様が本物で、今こうして生き返った
のだろうか。

心の中で考えた願いを神様が叶えてくれたのだろうか。
しかし疑問はいくつもある。

そんなことが可能なのか。まずONE PIECEの世界は漫画
の中の話だ。

その中に入ることが可能なのだとして、俺が行動することで何か影
響が出てしまわないだろうか。

そして俺の父親の名前。
ゼファー。

あの黒腕のゼファーだ。

その息子は原作では、生後3年で死んでしまった。
つまり今2歳の俺は、あと一年で死んでしまうことになる。

ゼファーを恨んでいる海賊に殺された、ぐらゐの情報しか認識して
いない俺が回避するのは困難。

俺が強くなって撃退するのも、あまり現実的ではない。

ゼファーの息子という要素と神様がくれたと思われる才能で武装

色も見聞色も今の所使えるが、所詮子供。

父親には遠く及ばないのはもちろんのこと、とてもじゃないが大人に敵う気がしない。

それに頭の中で考えていたお願いの一つ。

創作物の中の力を手に入れたい、というものが叶ってない。

ならば鍛える、というのもダメ。

理由は俺がある程度の年齢に達するまで、両親に鍛えるつもりがなく、鍛える方法が分からないから。

なので今は独学で鍛えるしかない。

常時見聞色を発動しておいて、武装色も見えない服の中で発動しておく。

鍛え方がわからない以上、これぐらいしかすることないし。

筋肉と同じようなもので、使い続ければ強くなるかな、という安直な思考からとった。

だんだん近づく死期が恐ろしい。

なんの対抗策もないので、ただ待つしかない。

これは二回目の人生。

生き返れただけでも儲けもの、と若干諦めながら日々を過ごした。

1. 悪魔の実

ONE PIECEのなかで強くなる方法といえば色々ある。

六式、覇気、そして悪魔の実。

3歳の誕生日。ゼファー、つまり俺の父親から送られた誕生日プレゼントは、悪魔の実だった。

悪魔の実というのは『海の悪魔の化身』といわれている果実で、食べた者に特別な力を与えられる。

何億ベリーもの価値があり、その実一つだけでそこらの海賊ぐらいなら倒せるだけの力が得られる。

ただそれだけの力、もちろんデメリットもあり、海に嫌われる。

海に嫌われると海水や海棲石などに触れるとカナヅチになって力が抜けてしまうなど、海賊にとって致命的なデメリットだ。

それでも悪魔の実を食べる人が多いのは、それだけ“特別な力”によるメリットが大きいからだろう。

どうやら倒した海賊船の中から発見したらしい。

すっかり元帥から許可を貰っているようだが、よく許可をもらえたものだ。

見た目や形などを観察して、父親が悪魔の実と一緒に持ってきた悪魔の実の図鑑で調べる。

図説まで載っているものは少ないが、幸い目の前にある悪魔の実の名称や能力は載ってあった。

ゾオン系トリトリの実 モデル梟。

身を食べたものは、姿が梟のようになり、音もなく飛べ、暗闇の中でも見える目や優れている聴覚などを手に入れることができるようだ。

しかし残念ながらゾオン系。

人獣型であるこの実は、姿が大きく変わってしまう。

それに原作を知っている俺としては、あまりゾオン系が強いと思えない。

食べるのは保留にしよう。

死ぬのは3歳、つまり今年。

それまでにもう一つ悪魔の実が手に入るとは思えないが、念のため、だ。

もしめちやくちや強い実が入っても、すでに実を食べていたら、食べれない。

父親には、もう少し考えてから食べると伝えて、木箱の中にその実をしまった。

○☆○

ある寒い日の夜。

俺の家に人目につかないよう向かってくる人物を俺は見聞色の覇気で捉えていた。

母親は隣で寝ていて、起きそうにない。

ガンツ！

強烈な音が響き、玄関の扉が無理やり開かれたことを教えてくれた。

流石に母親も目を覚ました様子。

しかし寝起きだからか、ボーとした様子で動く気配がない。

自分の心臓の鼓動が早くなるのを感じながら、隠してあった木箱に向かっていく。

箱を開け、久しぶりに見た悪魔の実は、相変わらず毒々しい色をしていた。

結局、今日まで新しい悪魔の実を手に入れることができず、これを食うしかなくなった。

せつかく手に入れた美しい容姿。手放すのは惜しいが命の方が何倍も大切だ。

意を決して悪魔の実をひとかじり、海賊がこの部屋に入ってきたのとそれは、ほぼ同時だった。

――

俺らは昔、海賊をやっていた。

別にONE PIECEを求めて航海しているんじゃない。

そんなものあるわけないし、夢見るお年頃じゃないからな。

仲間と海賊名乗って、馬鹿やって。

たえ周りの人から悪と断じられようと、それは楽しかった。

しかしそんな楽しい日々も、あの一瞬で終わった。

たまたま会った海軍の船に、たまたま大将が乗っていた。

文字にするとただそれだけ。

黒腕のゼファー。

その大将の黒い腕は、たった一発の殴りで俺らの日々と海賊船を粉々にした。

決して俺らを殺すことをしなかったゼファー。

それなりに覚悟を決め、仲間と共に航海してきた俺にとって、それは侮辱以外の何物でもない。

捕まって釈放され、ついにこの日を迎えた。

復讐だ。

あの日、俺らを侮辱したゼファーに。

本人に挑むなんて馬鹿な真似はしない。

あの黒い腕が迫ってくる光景をもう一度見たいとは、死んでも思わなかった。

なら、弱いところを突けばいい。

基本的に誰にでも弱点はある。

多くの人の弱点は、親しい人。家族ともなると尚更だ。

ゼファーの家の場所を探り、家に息子と嫁、二人だけになる日を狙った。

積み重ね、やっと辿り着いた復讐の日。

ミスは許されない。

覚悟を決め、開けた扉の先にいたのは、片目を赤く染め、背中から赤い翼を生やしている少年だった。

明らかに人外のそれ。

悪魔の実といわれるものを知っている俺は、すぐに能力者だという

ことがわかった。

ならば何かされる前に殺さないところちが痛い目を見る。
構えていた銃をその子供へ向け。

一発。二発。三発。四発。

連続して鳴り響いた銃声は、確実に当たったという手応えとともに
俺の鼓膜を揺らす。

死んだかどうか確認を、そう思って捉えた視界のなか映ったのは、
平然としている子供。

余裕があつた俺の心からそれが無くなっていく。

化け物。敵わない。そう思ってしまったから。

せめてゼファアの嫁だけでも、そう思い銃をもう一度構え、そこで
意識を失った。

――

殴り、気絶させた男を見下ろしながら思う。

梟つてそつちの梟かよ!?

海賊を倒した少年の顔は、どこか間抜けだった。

2. 能力

その後、母親が海軍に連絡を取り、連絡を受けて来た海軍が海賊を捕まえた。

母親も事情聴取と言う名の軽い質問を受けていたようだが、話題はすぐ俺に移った。

3歳児が指名手配もされていない、弱い海賊とはいえ倒す。

誰が聞いても驚く内容で、誰が聞いても信じない。

悪魔の実を食べていなければ、だが。

一応、悪魔の実を食べていたから倒せた、で収まった。実際にそうだったしね。

しかしまた別の問題が。

俺が食べた、トリトリの実 モデル梟。

俺以外にも昔、食べた人がいたらしいが、その人に発現した能力は、他のゾオン系と変わらなかつたようで、俺みたいに片方の目が赤くなったり、背中から赤い翼が生えたりはしなかつたようだ。

多分このことが神様に叶えてもらったお願いだろう。

モデル 動物の梟であった悪魔の実を、あの東京喰種の梟にする。

東京喰種の梟と言ったら二人。

隻眼などころを見ると一人に限られる。

隻眼の梟、芳村 愛支。

喰種の組織、アオギリの樹の幹部であり、高槻 泉というペンネームで本を書いている喰種。

その強さは、東京喰種一期の中で最強に近く、特等を何人も相手に出来るほどの実力。

また共食いを繰り返したもののだけがなれる赫者でもある。

前世では俺も好きだった。

あの強さも、普段包帯で身体中を覆っているミステリアスなところも、隻眼という珍しさも。

しかし実際になりたいとは思わない。

何故なら喰種は人と喰種の肉以外は消化できず、美味しいとも感じない。逆にありえないぐらい不味く感じてしまう。

人はもちろんのこと、人の形をした喰種を食べたいとは思ひもしないし、大好きな食べ物を食べられなくなるのもごめんだ。

話が逸れたが、俺が食べた実の能力が違うというので問題になっている。姿、形、色。全て同じなのに能力だけが違う。

これは今までなかったことで、俺が食べた実だけが特別なのか、それとも他にもこのような実があるのか。

悪魔の実の図鑑の信憑性に関わる問題だし、例えばゴムゴムの実だと思っただけなのに実はノロノロの実だった、とかなってしまいかもしれない。

他にはないと俺は断言できるが、3歳児の意見など聞いてもらえるわけもないので言わない。

神様のせいで俺は関係ない、と頭の中で言い訳をしつつ、悪魔の実の能力について考える。

梟、隻眼、羽赫。

その3つが揃っているので隻眼の梟をモデルにした実だと思う。強さは申し分ない。

しかし先ほどもいったように人と喰種以外食べれなくなってしまったらどうしよう。

自分が死ぬぐらいなら人を食べるぐらいの覚悟を、喰種が空腹を感じるまでの期間、約一ヶ月までの間で決めれるだろうか。

今考えても仕方ない。次の考察に移ろう。

原作で見た梟の姿ではなかったことから赫者ではないと思う。

エトが赫者になったのは本人の努力。

元々赫者ではないのだから、それは納得だ。

では赫者になるにはどうしたらいいのだろうか。

原作では喰種を食いまくることによってなることができる。

ただこの世界、つまりONE PIECEの世界に喰種なんていない。

考えられることとしては、共食いを繰り返す、人間を食べることで赫者になれる。または、なれない。この二つだ。

人間を食べるなら赫者にならなくてもいいけど、残念ながら死亡フラグが乱立しているこの世界。

生半可な覚悟で生きていけないし、力がなければすぐに殺される。

いつか食べなければいけない日が来るかもしれない。

考えるだけでも嫌な気分になる話は置いておこう。

結局これも、考えてもわからない。

疑問といえばこれぐらい。

今、分かることが少ないせいで、湧いてくる疑問も少ないし、その答えも出てこない。

これから少しずつ能力について解き明かしていこう。

3歳児の身体に夜更かしはきついし、思ったより初戦闘で疲れていたようで、俺はすぐに夢の中に入っていった。

3. 10年後

悪魔の実を食べた日から10年。

意外に早く感じられたのは、能力の研究や父親からの軽い訓練など、楽しいことがたくさんあったからだろう。

能力の研究。

結果から言うと分かったことは三つ。

一つ目は人間以外も食べれたこと。

全ての食べ物がいつもと何ら変わらない味だった。

二つ目は自分が能力を全然扱いきれていなかったこと。

羽赫を飛ばそうとしても、うまいように動かせず、動かせたとしても、どうやって飛ばすかわからなかった。

いきなり腕が増えたようなもので、そんなものをすぐに扱えるわけがないが。

ゴムゴムの実を食べたばかりのルフィだって扱いきれず、自分で自分を殴ってたしね。

そして父親からの訓練も大半は能力の扱い方だ。

俺たちが襲われたことに責任を感じ、大将を辞め、海軍の教官をやっている。

原作通りの結果になってしまった。

ゼファーといえば、結構可哀想な人だという記憶がある。

確か海軍を信じ続けたが、自身の教え子達を殺した海賊が七武海に任命されたことで海軍に絶望してしまう。

原作と違うのは息子である俺と俺の母親である嫁が死んでいないこと。

それがうまく作用してくればうれしい。

そんな父親だが、俺がバレないように覇気の練習をしているのを気づいていたらしい。

特に俺を鍛えるつもりもなかった父親だが、本人が強くなるのを望んでいるのと今回の件で、強くなっておいても損はないと思ったように、考えを変えたようだ。そこは母親も承諾済み。

それからは覇気だったり、悪魔の実の能力だったり、体術だったり。色々なことを教えてくれる。

そのおかげで13歳の今では、懸賞金五千万ベリーぐらいの海賊より少し弱いぐらいの実力を得た。その代償は友達だ。

前世で少なからず友達がいた俺だが今回は0。

才能も美貌もなかった俺だが、それでも友達がいた俺。

しかし才能と美貌を手に入れ、人生薔薇色だと思っていた俺に友達0人は、重くのしかかった。

意を決して、数少ない話し相手になんで友達ができないかを聞いてみると、出来るやつ感があつて近寄りがたい、3歳で海賊を倒した化け物という噂が広まっているから、親がああ黒腕のゼファーだから。それぐらいまで聞いて、俺は聞くのをやめた。

子供って素直だから時々傷つくよね。

何気に今回の人生で一番傷ついたことは置いておいて最後の分かったこと。

武装色を纏った攻撃、海楼石を使った攻撃以外効かないってこと。ロギアみたいなものだ。その事実を知った時は嬉しかった。

作中、最強みたいな扱いを覇気が出るまで受けていたロギア。

そんな存在とほぼ同じなんだから嬉しいに決まってる。

「おいエト！訓練の時間だぞー！」

庭から聞こえる父親、ゼファーの声。

考えるのに夢中になって時間を忘れていたらしい。

「すぐ行くー！」

そう返事を返し、俺は走り出した。

○☆○

「遅いぞ、エト」

赤い髪の毛を風で揺らし、軽く髭を生やしたがっしりした男、ゼファーは俺が庭に出た瞬間にそう言った。

映画で観た、あの老いたゼファーの姿ではなく、42歳には見えな

いほど若々しい男が庭に立っている。

「ごめんごめん。考え事してたら遅れちゃって」

そう返すのは翡翠色の髪と同色の瞳を持つ、華奢な体付きの男、俺だ。母親からの遺伝で翡翠色になった髪の毛と瞳は、東京喰種のエトのようで、結構気に入っている。

「今日は海賊王、ロジャーが処刑される日。時代は大きく変動する。その荒波に飲まれぬよう、お前には力をつけてもらわないとな」

そう今日がああ海賊時代の始まりの日だ。

精神年齢がいい感じの歳になったにも関わらず、ドキドキしてしまうのは、体に引っ張られているからだろうか。

今日行う訓練は模擬戦。

もちろん相手は、あのゼファーだ。手加減してもらおうけど。

何回もやったことだが、映画で観たゼファーと戦えると思うと気分が少し高揚する。

ルールは簡単。

客観的に見て、負けたと判断された方が負け。審判は母親だ。

父親は俺にダメージを与えるために、微量の覇気を使ってもいい。

俺は覇気も能力も使ってもいい。

それ以外にも身体中に重りをつけていたり、歩きにくい服や靴にしたりとハンデ盛りだくさんだ。

「準備できたよ」

準備体操に能力のちよつとした確認。それを終えた俺は、母親にその声をかけた。

その後に発せられるカウントダウン。

5秒数え終わったらスタートだ。

5

4

3

2

1

0

長く感じられた5秒が過ぎ、カウントが終わった瞬間、父親に向けて走り出した。